
なんやかんやでネギの双子の妹に転生して以下略。

蒼弥

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なんやかんやでネギの双子の妹に転生して以下略。

【Zコード】

Z91920

【作者名】

蒼弥

【あらすじ】

この小説は、数ある「魔法先生ネギま!」の一次創作の一つです。主人公はネギの双子の妹として転生し、ネギのサポートをしていくようです。王道・原作改変・設定捏造を忌諱される方はご遠慮下さい。

注意

作者は「魔法先生ネギま!」の原作をきちんと読んだことがあります。つる覚えの知識や、他の作者様の書かれた一次創作等を参

考にして書いています。ですから、違和感や間違いがあった等の報告があったとき、度々修正が入るかと思います。

また、この小説は不定期更新です。一月に一度更新されれば儲け物、程度であることをご了承下さい。

第一話「あー、ああうー、あー！」

人生っていうものは、何が起こるかわからない。どんなに非常識且つ非現実的な出来事だって起きるときには起きるし、絶対だとされていたことでも簡単に覆される。

僕の場合も、そんな中の一つでしかない。

有り体に言えば、僕は死んだ。

腹が裂け、骨が砕け、内臓が潰れた。我ながら見事なスプラッタが出来上がっていた。感動のあまり思わず吐きそうになつたね。まあ、その時には靈魂の状態だったから、吐き出すものなんか無かつたんだけど。

それで、しばらくしたら成仏したんだけど……糸余曲折あって、死後の世界（？）で神様とか名乗る爺さんに転生させてもらえることになった。もちろん前世の記憶付きで。

最初は、胡散臭い爺さんだな、なんて失礼なことも考えてたんだけどね。話してみたら案外面白くって。なんだか気が合つて、なんだかんだと話をしている内に、そんな流れに。

爺さん曰く「そなたほどの魂をこのまま無かつたことにするのは勿体ない。それにそなたは私の友。一度転生し、そなたの靈格を上げてこい」とのこと。もう一度生きられるのは嬉しいし、断る理由も無いので快諾。爺さんも一緒に来ようとしたんだけど、秘書さん三対六翼の白い翼が背中に生えてる知的美女が却下して、代わりに生まれたばつかの新米神様を後で僕の所に送るんだって。その新米神様が爺さんに逐次報告する、つて事で方針が決定。

そのあとで、何処の世界に転生するか、つて話になつて。てっきり僕は、元の身体に蘇らせてもらえると思っていたんだけど、「それだと面白くない」との一言であえなく却下。まあ、その方が楽し

そうだし、いいけどさ。「剣と魔法でファンタジーな世界が良い」と言つたら爺さんが採用。そこまで条件を絞り込んで それでも星の数ほど候補はあつたけど その中からランダムで転生する」とい。

「最後に、何か要望は？」

その他諸々の準備を終えると、爺さんが僕に聞いてきた。

「せつかく魔法のある世界に行くんだから、やっぱり使いたいよね、魔法」

「わかった。期待しておれ」

「ありがと」

「ふむ 時間だ。良き人生を」

大きな期待と、ほんの僅かな不安。今度はあんな死に方したくないな、とか思いながら、僕は意識が無くなつた。

~~~~~

「ふう。なんとか無事に転生出来たらしい。てっきり胎児の状態からかと思っていたけど、幼児服を着ているようだし、産まれてからしばらく経っているらしい。僕の寝る隣からは、静かな寝息と、

わざかに身じろぎをする気配。どうやらほかにも誰か寝ているらしい。そのまましばらくぼうつと考へ事をしていると、おそらく夫婦いの僕から見れば両親 だらう一人が、僕が起きたことに気づいた様子を見せる。

「おつ、アウロラが起きたみたいぜ。ネギの方は、まだ寝てるみたいだけだな」

「……ふむ」

うん。言葉が全く分からない。よく考えたら、此処つて異世界だもんね、言葉が違うのは当然だつた。それにしても英語にかなり近いようだけど。

それに加えて視界もはつきりしない。赤ん坊だから視力が発達してないのかな？ そんなぼやけた視界の中で、近くにいた母親らしき女人が、何か言いながら指をこちらに近づけてきた。とりあえず、不自由ながらもその指を握つてみる。

「あーうやー」

「……ふふつ」

サービスして適当に喋ると、小さくだけど、とても優しく微笑んだ。……多分。母親の隣に居る能天氣そうな赤毛の男の人（こっちは父親だらう）も穏やかな雰囲気だ。隣はぐっすり眠つてる。幸せそうな家族だ。それだけでも、生まれてきて良かつたと思える。

不意に彼女の表情が曇る。

「すまぬ。おぬしらには、きつと辛い道を強いることになるだらう」

「姫さん……」

「ネギ、アウロラ。」

「どうか兄妹で仲良くしてくれ。共に力を合わせ、如何なる困難も乗り越えられるように」

願うように。

祈るように。

僕と、を優しく撫でながら、何とも言えない雰囲気で呟く。

「なあに言つてんだよ姫さん！」こつらは俺と姫さんの子供なんだぜ？ そんな心配必要ねえよ」

「そうだろ？ とでも言つよに、父親が一カツと笑いながら母親に向かつて言ひ。でも、それでも母親の表情は晴れない。……しようがない。

「だが、ナギ……」

「あー、ああうー、あー！」

「ほら、アウロラだつて言ひてるぜ？ 大丈夫だ、つてな」

「……そう、だな。私と我が騎士の子なら、どんな災厄も避けられよう」

「そうそう。それに、スタン爺さんの所なら安心できる。こざとなつたら、メルティアナの奴らも、少しは手助けしてもらえんだろうしな」

ふう。無理して大声出した甲斐があつたみたいだ。どんな会話だつたのかはわからなけれど、この二人が、お互ひを信頼している事はわかつた。

どうやら僕は期待以上の夫婦のところに生まれたらしい。これら前世みたいな事に成らずに済みそうだ。

と、あれこれを考えている内に、猛烈な眠気に襲ってきた。赤

ちやんだしね。もつちよつと起きていたいけど、これ以上は無理っぽい。

まあ、別に良いか。まだまだ機会はあるだろっし。

そんな甘い考えをして 僕は、睡魔に身を委ねた。

## 第一話「あー、ああうー、あーー」（後書き）

と、いうわけで。始まりました、初の一次創作。いや、オリジナ  
ルもきちんと書いたこと無いんですけどね。

この小説、アンチ的な要素はあんまり含まれませんけど、キャラ  
改变とかは普通に行われます。と言つより、きちんと原作読んでな  
いのでキャラをしつかり捉えてない、と言つべきでしょうか。まあ、  
なんとか成るでしょう！……なると良いなあ。

あ、ちなみに。ストックとかプロットとか、そんな高尚な物は作  
つてません（キリッ！）

だからといつ訳ではありませんが更新は遅いです。忘れた頃にや  
つて来ます。……し、仕方ないじやないつ！ 受験勉強の息抜きで  
書いてるんだからつ！

あとあと、感想の批評は、返信まで期間が開くことがあるのでご  
了承下さい。

感想下さい、つて事ですよ！ それくらい言われなくとも察しな  
さいよ！……え？ ち、ちがつ！ べ、別にアンタの気持ち  
が知りたいわけじゃないんだからねつ！？ ……よし。シンデレラ  
たから多分明田には一百件くらい感想来てるな。

## 第一話「ぼくだって、家族なんだよ」

光陰矢の如し。ぼくがこの世界に転生してから、三年の月日が流れた。ぼくたちは今、イギリスはウェールズにある村に暮らしている。

……うん。ぼくも驚いた。もといた世界なのかとも思つたけど、ところどころ知らない地名がある。いわゆる『平行世界』というやつなんだろう。地理を一から覚えずに済んで助かつた。英語？ 気合いで覚えましたとも。成長期万歳！

この村は、言つてしまえば田舎だ。それも半端なものじゃない。ただ、空気は澄んでいるし、独特ののんびりとした雰囲気で満ちていて、住民も少ないながら、みんない人ばかりだ。

さてはて。この三年間で、この世界の事がいろいろわかつた。

先ず一つ目。この世界には、秘匿こそされているが、『魔法』が存在している。そして、魔法を扱う事が出来る人を『魔法使い』と。世界中には、『精霊』と呼ばれる存在。魔法というのは、その精霊に、『魔力』を代償にして願いを叶えてもらうというもの。まあでも、お伽話とかに出てくる物とは違つて、魔法は万能じゃない。難しいことをしようとすれば、それ相応の対価つまり魔力を必要とするし、人によって得手不得手もある。才能も努力も必要とする、一種の技能つてだけみたい。魔法を知つているいわゆる『裏側』の人たちでも魔法を使えない人はいるし、魔法を知らない一般人でも強大な魔力を持つ人間はいる。らしい。ぼくが知つている魔法使い、そのほとんどが『魔法』と言うものを崇高な何かのような物言いをする。だけど、普通に生きてくだけなら、別に魔法が使えなくても支障はないよね。使えるなら便利だと思つけど。……まあ、これも『持つてる人』の言い分なんだろうね。

次いで二つ目。ぼくの家族のこと。

どうやらぼくは双子のうちの一人に生まれたらしい。つまり、ぼくには双子の兄さんがいる。

名前は『ネギ』。初めて知つたときは、名付けた人のネーミングセンスを疑つたね。ちなみに名字は、『スプリングフイールド』。直訳すれば、『春の野原の葱』だ。そんな名前、ぼくなら一生の恥だな。他人事で良かつたと心底思う。

だがしかし。そんな印象しかなかつた兄さんだけど、なかなかどうしてハイスペックだった。

三歳児にしては頭が良く、すでに言葉がはつきりとしているし、理解力も高い。運動能力もますます。そして何より、顔が良い。つまりはイケメン。どういうことだ。

父親譲りの赤毛に、理知的な面差し。従姉妹のネカネさん曰く「お父さんにそつくり」。そうか、父もイケメンなのか。モテない男子の敵だな。つまりぼくの敵だ。

そんな父だが、名前を『ナギ・スプリングフィールド』といい、なんと『千の呪文の男』などという異名を持つ有名人。十年くらい前に起きた戦争を終焉に導いた英雄で、魔法使いたちの憧れである、『立派な魔法使い』の称号を持つ、らしい。へー。

そんな訳で村の人たちは、『英雄の子供』であるぼくたちに、馬鹿みたいに期待した目で見てくる。……これさえ無かつたらいい人たちなんだけどなあ。当然ぼくはそんなこと知つたこっちゃ無いから、好き勝手やらせてもらつて。三歳児さいこー！

英雄様と結ばれたぼくたちの母親だけど……なんとか誰も教えてくれない。教えられないような人間なのか、はたまた別の理由があるのか。うつすら記憶に残る彼女の印象は、子供思いの素敵な女性、つて事くらい。ぶっちゃけその時しか両親の事見てないし、気付いたら二人ともいなくなつてたんだから、覚えてろつて方が無茶な話。というか話を聞くに、父も母も、ぼくらが生まれてからすぐに死

んだらしい。前世のみならず今世までもがこんな家族環境とか。どうしてこうなった。しかもなぜか兄さんには避けられてる。とか逃げられる。何もしないのに。何もしてないのに。…どうしてこうなった！……たつた一人の家族なのに。どうやって兄さんと仲良くなるかが田下の悩み。

さてさて。意識的に最後に持つて来た訳だけれど……しょうがない。ぼく自身のこと。

長く伸ばした艶やかな黄金の髪に、白滋のじとき滑らかな白い肌。冬の晴れた空の、透き通った蒼色の瞳。人形のよつに可憐らしい面立ち。

それはまさに、絶世の美少女。

……まあ、美人に生まれたのは、素直に嬉しいんだ。前世のぼくは至極平凡な顔だったし、それはもう、一時間ほど鏡の前を動かなかつたくらいには嬉しい。正直ちょっとナルシスト入ってる。

しかし。しかし、だ。

なんでおんななんだよ！！

アウロラ・スプリングフィールド。それがぼくの、この世界での名前。ちなみに愛称はローラ。アウロラというのはつまりオーロラのこと。ちなみに愛称はローラ。アウロラとこの名前でもある。兄さんと比べて、なんとまあ大層なお名前で。名前負け感が半端無い。つてか、前世のぼくは男だったんだぜ？ それも女の子との接点なんて中学生までだったし。ボーアッシュユツレベルじゃねえぞ。女の子なんて、どうすれば良いんだ。

とは言つても、さすがにもう三年もこの身体で生きているだけあつて、少しずつだけど慣れてきた感もある。人間やっぱり慣れだよ慣れ。……うそ。スカートだけはまだ慣れてない。

うん。とりあえず、今の所はそれくらいか。両親のこととか、人たちの過度な期待とか、いろいろとしがらみはあるけれど。まあ、願つてもない第一の人生を手に入れたことだし、ぼちぼちやっていくしかないよね。

…… そういえば、爺さんが言つてたサポート役の天使、いつになつたら会えるんだろ。

## §

人間の性格というものは、生まれつきのものもあるが、育つた環境も大きく影響を与えるものだ。人格形成の基礎となる部分はだいたい乳幼児期に出来上がると言われていて、この頃にどんな教育・経験をしたかによって、どんな人間になるかが決まってくる。もちろん後から逐次修整されていくものだし、人間なんて常に変化していく生き物だ。

それでも、何事も始めは肝心だ。土台がどんなものかによって、上に築き上げるものも様相が変わつてくる。土台さえしつかりと造り上げられているのなら、やり直しとまでは行かなくても、後から補修も修正もやりやすい。

まあつまり、何が言いたいのかというと……。

「……兄さん、何のつもり？」

「…………だつて」

「もう春だからって、湖に飛び込んだら風邪を引くだけだよ？」

「…………」

只今絶賛教育中。

兄さんは何をトチ狂つたのか、自分から湖に飛び込んで、あげく溺れるという謎の行動を起こした。ぼくがたまたま一緒に遊んでいなかつた時で、兄さんを止めることが出来なかつた。今は、騒ぎを聞いて駆け付けた村の人助けられて、家に帰つたところだ。

それにしても、村の人たちは甘い。というか、いつたい何を考えてるんだ？ 子供が勝手に湖で遊んでいて、その結果溺れたというのに、きちんと兄さんを叱つていたのはスタンさんという村の老魔法使いだけ。保護者代わりである従姉妹のネカネさんは困つたような顔で窘めるだけだし、村の人たちなんて「元気があつていい」だなんて笑つてゐる始末。これ、一種の育児放棄だよ。……ちょっとだけ、頭にくる。

「……ねえ、兄さん」

「……なに？」

出来るだけ、怒りを表に出さないように。兄さんにもそうだけど、この怒りの大半は、教育を嘗めきつてゐる村の人たちに対するものだから。ハつ当たり、いくない。

「兄さんは、どうして湖に飛び込んだの？」

「……」

せつときは違つて、今度は穏やかに。頭<sup>い</sup>なじじや、余計に言いづらいだろうし。というか言いたくないだろつし。

そのまま兄さんの顔を見て、兄さんが話し出すのを待つ。春になつたとはいえ、湖はまだまだ冷たい。兄さんは、それがわかつていて理由も無く飛び込むような馬鹿じやない……と思つ。

「……たすけに、きてくれるとおもつたから」

「助けに、つて……誰が?」

「……お父さん、が」

「お父さん?」

「僕がピンチになれば……お父さんが、たすけにきてくれるから……」

「……ああ、そつか」

納得、してしまった。兄さんの気持ちが、わかつてしまった。

一度だけ、兄さんと二人で聞いたことがあった。みんなが褒め讃える父親と、誰も話したがらない母親。顔しか知らない二人は今、ぼくたちをあいて、何をしているのか、と。ネカネさんは、悲しそうに笑つて何も答えてくれず、スタンさんはただ一言、「死んだ」とだけ吐き捨てるように言つて、寂しそうにお酒を飲んでた。兄さんは『死んだ』ということの意味がわからず、もつと詳しく聞いていて、ネカネさんが「遠くに行つてしまつたの」なんてぽかしてた。『死』の概念を教えるのは、本当に難しい。こればかりは、時とともに、自然に悟るしかない。自分で経験して、その意味と恐怖を覚えるしかないから。まだ三歳の兄さんは、まだそれを知らない。だから、自分が危険な目に遭えば、助けてくれると思つてしまつたんだろう。父親が、『英雄』だつたから。

『英雄』が、助けに来てくれると言つて。だから、そんな馬鹿な真似を。

……気持ちは、よくわかる。ぼくも、そうだつたから。

親がいなのは、さみしい。まだまだ甘えたい盛りで、なのに、無条件で甘えることの出来る人がいない。

ネカネさんがいる。村の人たちだつてよくしてくれる。

だけどやつぱり、『親』つていうのは、特別な存在だから。特にぼくらの場合、父親が『英雄』だから。

「……あの、や」

だからといって、今回のことは許せない。

「ぼくだって、家族なんだよ」

もしあの時、近くに人がいなかつたら。誰も気付いてくれなかつたら。

もしかしたら、兄さんは死んでいたかも知れないから。

「ぼくだって、兄さんの家族なんだよ」

……それに、ぼくとこつ妹がいるのに、家族を求めるなんて屈辱的じやないか。

何で兄さんがぼくのことを避けるのかは知らない。けれど、ぼくたちは家族なんだ。兄さんはぼくのことをきらつているかも知れない。それでも、ぼくは兄さんと仲良くなりたいと思つてゐるんだ。

「兄さんが求めるなら、ぼくがお父さんの代わりになるから。お母さんにも、お兄さんにも、お祖母さんや弟にだって。兄さんが寂しいなら、ぼくがその分、たくさん家族になるから」

「……」

だいたい兄さんは欲張りすぎなんだよ。ぼくだけじゃなくて、ネカネさんも、スタンさんも、いつも一緒に遊んでるアーニャちゃんだつて。みんな兄さんを見ててくれているのに。こんなにも兄さんは恵まれているのに。

「それに、兄さんだって、ぼくの家族なんだよ。兄さんは、お父さんだけいれば、妹のことはいらぬの?」

「……そんなこと、ない」

「だったら、もつとぼくを見て。お父さんもお母さんもいないけど、ぼくは、今、ちゃんと兄さんの前にいるから。いつだって、兄さんのやばいところから」

「……うん。『めんね、ローラ』」

「いいよ。ただ、もうこんなことはしないでね」

「うん。わかった」

「ひとつと、一人で微笑みあう。

多分こんなのが、兄さんの寂しさは拭えないだろうし、結局なんでぼくのことを避けてたのかも聞けないけれど。でもまあ及第点は貰つても良いだろうと思う。それに、村の人たちの事もあるから、ぼくが兄さんの親代わりもしなきやだろうし。それならきっと寂しくなくなるよね。

そうだ。どうせ教育するなら、完璧な英國紳士でも手指してみようかな。もちろん頭に『変態』なんて付いてない方の紳士です。兄さんはイケメンだし、頭も良いし、何より最近暇だったし。紳士的で嫌味の無い性格にしてしまえば、もう完璧じゃないか。モテモテ間違い無しだね。リア充爆発しろ。

洗脳？ いいえ、教育です。家族が出来るのなんて初めてなんだから、どうせなら自慢できる人が良いじゃん。誰に迷惑掛けるでもないし。むしろ得するはずだよ。

うん。なんだか楽しくなつてきた。

「……ローラ、どうしたの……？」

「うん？ 何が？」

「な、なにって……いきなりこやにやわらいだしたから……」

「あれま。顔に出てた？」

「うん。ちょっときもちわるかった」

「…………そつか」

すぐ表情に出るところ、直さなこと。  
でもね、兄さん。その素直なところが美点だけど、世の中には、  
言つていいことと悪いことがあるんだよ。ましてや、ぼくは 不  
本意ながらも 女の子なんだから、言動には気を配つてね。素直  
と考え無しは、まったく違うものなんだから。

## 第一話「ぼくだって、家族なんだよ」（後書き）

センター試験まで、あと一週間強ツ！  
じんにちは。現役受験生です。

第一話から約一ヶ月経過しての一話目投稿という訳ですが、皆様いかがお過ごしでしょうか。私は最近、受験のストレスからか、独り言が多くなつております。端から見たら完全に危ない人間です。元からですけど。

さて。では本題に。

この小説は、ネギくんを立派な紳士とする物語です。それはもう、ご都合主義的に話が進んで行きます。紳士的な意味で。キャッチフレーズは、『もう“ラッキーすべき”なんて言わせないっ！ これであなたも立派な紳士に！』みたいな感じで。

アンチ物つて、読むのは面白いんですけど、個人的には書きたくないもののナンバー一です。だって書いてて嫌な気分になるじゃないですか。というか、ネギくんが馬鹿になりすぎて可哀相。せめて此処でのネギくんの扱いぐらいはマシにしたい……！  
非才の身ながらも、頑張りますよーっ！

## 第三話「アーラクテ ピギ ナル 火よ灯れ！」

四歳ともなると、『自分』といつものがしつかりと出来てくれる。段々と個性が出てきて、『その人らしさ』が見えるようになつてくるのだ。つまり、ぼくの教育が兄さんじんな影響をひいたのか、目に見える形で表れるよつになつたわけだ。

とは言え、ぼくは兄さんとほとんどの時間を共にしてるために、逆に成長に気が付かないところもある。近すぎて見えないモノといふのは、自分が思つているよりも沢山あるからね。些細なことでも見逃したくないのだ、すべては兄さんへの愛故に！

と、言つ訳で。たまたま遊びに来ていたアーラクテちゃんに、兄さんについて聞いてみた。

「ねえねえ、アーラクテちゃん」  
「なに、ローラ」「  
「兄さんの事、じつ思つへ？」  
「えつ？ ……ええーー？」

アーラクテちゃんは顔を真っ赤に染めながら、口をぱくぱくと開き、驚いた様子でぼくを見つめてくる。ぼくは砂場をこじる手止めに話を続ける。

「アーラクテちゃんは、よくぼくたちと一緒にこいのでしょ。でもや、普段はこの村にいないじゃん？」  
「うん。まあ、そうね」  
「日本の言葉にね、『男子二田余わざれば畠田じて見よ』って言つのがあるんだって」  
「どんな意味なの？」  
「子どもの成長は早いから、二田も経てば、まるで別人のよつです

よ。

ぞつくりとだけど、まあ、だいたいこんな感じの意味」

「へー。ローラは物知りよね」

「本をいつぱい読んでるからね。でも、この言葉の通りなら、ぼくらはすぐに大人になるつて事だよね。

ぼくらはまだ子どもだけど、知らないつ中に、毎日どんどん成長していくつて……気付いたら、もつ大人になつてるかもしねい」「えつと……うーん?」

「ぼくらはすぐに、子どもじやいられなくなる。大人にはなれなくとも、『子どもだから』なんて甘えられなくなつてしまつ。ぼくと兄さんは、なおさらね。

なら、せめて今だけは。今この時だけは、ぼくらが子どもであることを許してほしい。

「ぼくはね、アーニャちゃん。最近そつ思つんだ」

いつの間にか、ぼくは砂遊びをしていた手を止めて、真正面からアーニャちゃんを見つめていた。

「むずかしくてよくわかんないけど……けつきよくローラは、なにが言いたいの?」

「兄さんに聞するどんな些細なことも、ぼくは全部把握しておきた  
い」

「お母さんにきいたんだけね、ローラ。あなたの大好きな二ホンには、『ブラコソ』つて言葉があるんだつて。きっとあなたみたい  
な人をさすのね」

アーニャちゃん、ため息つきながら呆れ顔で言わないでください。ちょっと傷つきます。それにしても、ブラコソ呼ばわりは酷くないかな。どつちかつて言つたら、親馬鹿的な要素の方が強いからね。まあ正味な話、家族だなんて初めてだから、そういうのはよくわか

らないんだけど。つてかおばさんは娘に何を教えてんのや。……この親子は普段どんな会話をしてるんだろう。

「人聞きが悪いなあ。ぼくはただ、兄さんの事を愛しているだけだよ」

「二ホンゴはむずかしいけど、たぶんわたしはまちがつてないわ」「やうかなあ。……まあ、アーニャちゃんの兄さんに対する『好き』と違うことは、ぼくにもわかるんだけどね」

「えつー!? やつ、それはだつて、ローラはネギの家族だからですよー?」

「うん。まあ、やうだね。ぼくは兄さんの『家族』だから」

アーニャちゃん可愛いなあ。顔を真っ赤にして慌てちゃつてや。もう、素直じゃないんだから。

アーニャちゃんはツンデレだから好きな人に対してキツい当たりをしちゃうけど、いつもときの反応はとても可愛らしい。さすがにまだ五歳だから、恋愛感情じゃないとは思つけどね。独占欲的なものはあるみたいだけど。でも、その照れ隠しの所為で兄さん、アーニャちゃんに嫌われてると思ってるんだよなあ……。

「ローラ、アーニャ」

「ねつ、ネギー!?」

「あ、兄さん」

噂をすればなんとやら。離れて絵本を読んでいた兄さんがこつちに歩いてきた。何故かにこにこしながら。アーニャちゃんは何かわたわたしてた。

「ほくもね、ローラとアーニャのじと、こつぱーだいすきだよ」

……いやあ、恐ろしいね、無垢な子どもとこののは。」「こうとき、子どもの無垢で純粹なところが、とても眩しく見えてしまつ。」で失くしてしまうんだろうね、」の純粹さは。ぼくはもう前世で何処かにおいてきちゃつたからなあ。兄さんには、」の純粹さをいつまでも忘れてほしくない。

「どうか、子どもの何気ない一言に感じ入つてるとか、」りや完全に親の気分だな。両親がいないから、仕方ないっちゃ仕方ないんだけどさ。……ん？」この場合、ぼくは『父親』なの？ それともやつぱり『母親』なのか？ いかん。」の思考は捨て置いて。行き着く先が恐ろし過ぎる。

いやでも、まさか兄さんに聞かれていたとは。別に隠すつもりは毛頭ないんだけどさ。

「ぼくも、兄さんとアーニャのこと、」つぱい大好きだよ  
「えへへつ」  
「アーニャちゃんは？ アーニャちゃんは、ぼくたちの」と好き？  
「わ、わたしも言わなきやだめなの？」  
「だつてほり、兄さんもぼくも言つたんだし」  
「ぼくもききたいなー」  
「うひ」

兄さんのキラキラ上田遣い攻撃が、アーニャちゃんに猛攻撃を仕掛けている。アーニャちゃんの羞恥心との葛藤が見ていて面白い。何度も口を開いて言おうとするんだけど、羞恥心からなかなか言えない様子が、見ていてとても可愛らしい。

「……わ、わたしも一人のことば、えと、その……あつ、嫌いじゃないわよ……？」

首も耳も茹でダコみたいに真っ赤にしつつ、そっぽを向いて、恥

ずかしそうにしながら言つアーニャちゃん。 そうか、これが前世で言つ『萌え』なのか。前世じやいまいちピンと来なかつた感情だけど、今なら十二分に理解できる。しかもアーニャちゃん自身が美少女（美幼女？）だから威力倍増だね。

「アーニヤかわいいつ！」

「JRさん、日本たどり着く、『讀賣』」

卷之三

۱۰۹۵ - ۱۰۹۶

「アーニャちゃん戻えーー！」

「おまえが

「アーニヤがおこつたー！」

怒ったアーニャちゃんも萌えーっ！」

「いにがけんじ」

「にげろー」

キャラー キャー 言ひながら逃げ出すぼくと呪せんと、わつかとは違う意味で顔を真っ赤にしながら追いかけてくるアーニャちゃん。 ほのいつのも良いよね。 ほのいつと繰り返して、子どもは仲良くなると思うんだ。 走り回るのは体力を付けるのにちょうど良いし、それに何より楽しい。 主にアーニャちゃん弄りが。

。ちよつとからかいすがれやつたかな。

四歳の春。この日もいつもと変わらず、今まで通りの日常を過ごしていた。

兄さんは日に見えて成長して、生来の気質か教育の賜物か、子どもなりともなかなかに立派な紳士っぷりを見せるようになってきていた。最近は、村人の一人が語学教師の経験をしていたことを聞いて、兄さんと一人で教えてもらっていた所為か、とても綺麗な言葉を話すようになっている。変な訛りもなくて聞き取りやすく、耳に優しい。もし兄さんが英語の教師になつたら、英語の成績は飛躍するね。少なくともヒアリングの能力は鍛えられると思う。身内巣廻を差し引いても、だ。

アーニャちゃんは違うところに住んでるから頻繁には会えないけど、ちよくちよく遊びに来ては三人で遊んでいる。村にも子どもはいるけど、一番仲が良い友だちは、やっぱりアーニャちゃんかな。とは言つても、村の子どもたちとも結構仲良いけどね。

実はアーニャちゃん、魔法学校なるところに通つてるらしい、日々魔法使いの勉強に励んでいるとか。リアル魔女っ子だ。魔女っ子アーニャちゃんだ。……うん、ありだな。

というかぼく、実際に魔法を見たことないんだよね。魔法使いの集落に住んでるというのに、これは一体どういう事なんだ。もつとホグワーツ的な生活を想像してたんだけど……まあ、魔法に頼らなくとも普通に暮らせる科学力があるんだから、現実はこんなものか。とは言え諦め切れるはずがないので、今日はアーニャちゃんに無理を言つて、ネカネさんたちには内緒で貰つた魔法の杖（初心者用）を使い、実際に使ってみる事にした。呪文は本で確認済みです。でもさあ、こんな杖で本当に魔法使えるの？ この杖、ぱつと見おも

ちゃにしか見えないんだよね。一言で言えば、ちゃちい。厚紙と棒切れで簡単に作れちゃいそうなんだもん。尖端に星飾りが付いてるのも、それに後押ししてるね。

「じゃあローラ、いくよ？」

「うん。頑張って、兄さん！」

杖は一本しかないので、順番に使うことにした。まずは兄さんのターン。右手に持った杖を頭上に掲げ、杖の先を見つめながら呪文を叫ぶ。

「プラクテ・ビギ・ナル！ 火よ灯れ！」

兄さんの呪文に応じて、ぼう、と杖の先に火が灯る。それは決して大きな火ではないけれど、まあ所詮は初心者用の魔法だしね。

「う、ローラっ！ できたっ、まほうつかえた！」

「すごいね、兄さん。杖の先に火が灯ってるよ」

「これでぼくも、まほうつかいだねっ！」

よくは知らないけど、一回で成功させる、っていうのは結構すごいんじゃないかな。魔法の才能あるかもね、兄さん。

まあでも、よくよく考えるとぼくらって『英雄の子ども』だしね。魔法の才能も親譲り、ってことか。……納得いかない。

「それじゃ、はい。次はローラのばんだよ

「ありがとう、兄さん」

「がんばって！」

兄さんから杖を受け取る。こんなおもちゃみたいな杖で魔法を起

「そりゃなんて、正直半信半疑だったんだけど。実際に兄さんは使えてしまったものだから、これはいよいよ馬鹿に出来ない。でもやつぱりこっちはちょっと……。」

「……はあ、文句言つてもしょうがない。とりあえずぼくもやるしかない、か。」

「プラクテ・ビギ・ナル 火よ灯れ」

「……」

「……でないね」

「……そうだね。失敗、かな」

「使えねえじやねえか。兄さんは出来たつていつの間に、なんでぼくは出来なかつたんだろ。もしかして、魔法の才能ゼロ……？」あ、魔力が欠片も無いとか？

「…………。…………ん？」

「あ、魔力か」

魔法使うのに、魔力のこととか一切忘れてた。そうだよね、棒切れ持つて何かぶつぶつ言つただけで、魔法が使えるはずが無いよね。うわー、恥ずかしいなあ。

とは言つても、魔法に触れずに何年も生きてきたのに、いきなり自らの魔力を探れだなんて難易度高そうだ。あ、今まで無かつたものを探せばいいんだから、逆に易しいのか？まあ頭で考えてても仕方ないし、とりあえず探してみるしかない、かな。

「ん…………？」

目をつむつて、意識を身体に向ける。漫画とかなら、心臓とか丹

田とか、あと女の子の場合は子宮の辺りに魔力があるっていうのが、結構メジャーな設定だつた気がする。それを考えると……あ、これかな？ なんかそれっぽいのを発見。なら次は、それを動かして……つて、なにこれ。全然言つこと聞いてくれない。

しばらぐんうん唸りながら試行錯誤して、どうにか動かす。うわ、何で兄さんはあんなに簡単そうにこなしてんの。これが才能か。ぼくだって英雄の子どもだぞ！ 頑冥反対！

「うなつたら、この怒りをぶつけやる。見ていて兄さん。口一  
ラ、輝きます！」

「プラクテ ビギ・ナル 火よ灯れ！」

瞬間、身体を貫く閃光。

あつい。あつい。あつい！ 燃えるように熱い。まるで身体の内側から灼熱に侵されているかのような、痛覚を越え、ただ『あつい』という感覚だけが全身を支配する。

そのまま、握っていた杖が右手からこぼれ落ちる。耐え切れずに足の力が抜け、膝をつき、自身を抱くようにしながら倒れこむ。髪が汚れるとか、後で洗濯が大変そうだと、常のぼくなら思つていただろう事も気にしていられない。

「ローラー!?」

誰の声だろう。そんなことすら判断がつかない。あまりに強烈な『あつさ』。身体の中身が全部溶かされてしまったかのようだ。頭も溶かされてしまったから、だから『あつさ』しかわからなくなつ

ているんだろう。

何かと融け合つていく感覚。『あつた』はやがて『熱』に変わつていき、いつしか例えようのない快感となつてぼくを襲う。入れ替わつていく感覚は、それでも暴力的に『ぼく』に襲い掛かる。耐えられない。堪えきれない。少しでもその衝動を抑えようと声を張り上げる。壊れないように。壊されないようだ。

そして、不意に訪れる静寂。

『おかえりなさい。我らの愛しい娘』

何かが優しくぼくを抱き上げる。なぜかこみあげる懐かしい想いが頬をつたう。さつきまであつた苦痛もどこか遠くに感じる。

ああ、そうか……。

暗転。

そうしてぼくは眠りこついた。

## 第三話「プラクテ ピギ ナル 火よ灯れ！」（後書き）

お久しぶりです。そして大地震、ご愁傷様です。

我が家のある地域では震度五弱ということでしたが、幸いにも大きな被害は起きず、せいぜいが水道管の破裂程度でした。細かい損害はありましたが。大津波警報は出たものの、結局避難場所に行くことも無く。ずいぶんとマシな状況だったのではないかと思っています。

知り合いの無事も全員確認でき、ホッと一安心したところで約一ヶ月強振りの更新です。

大学受験が終わりました。無謀にも国公立大学を志望した結果の惨敗。面接でやらかしましたよ、ははっ。センター試験でも打ちのめされましたけどね。

それはさておき本文。実は悪魔襲撃まで終わらせたかったのですが、思つたより量が膨らみ、急遽次話に持ち越すことに。ただ今執筆中であります。でも原作を詳しく呼んでないから詳細がわからなーいの。教えてエロい人。今話は一ヶ月掛けてチマチマと書いた物を、とりあえず繋げているだけなので、いつか修整するかもです。

いろいろとあつたので今回の後書きは普通にやりました。それではまた次回！ しーゆーあげいん！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9192o/>

---

なんやかんやでネギの双子の妹に転生して以下略。

2011年11月17日20時17分発行